

3年生 「Unit 8 What's this? これなあに？」

1. 授業の実践記録

(1) 英語を用いて主体的にコミュニケーション活動に取り組むための工夫（仮説1）

【児童が「やってみたい!」「伝えたい!」と感ずる場面設定】

児童が主体的にコミュニケーション活動に取り組むために、相手とやり取りをしたい、自分も伝えたいという思いをもつこと、外国語でやり取りをする必要性を児童が感ずることが重要であると考えた。そこで、児童が「クイズの活動自体の楽しさ、面白さを感じながら学びを進めていく」ことを単元デザインの軸とし、さらに『1年生が外国語を楽しく学ぶきっかけになるようにクイズを出してほしい』と1年生の担任の先生から依頼される」という場面を設定した。

クイズに答えたり、自分でつくって友達と出し合ったりする場面を設けることで、「英語でのクイズのやり取りって楽しい!」「もっとやってみたい!」という児童の学習意欲を喚起させ、進んで学習に取り組めるようにした。また、「1年生が外国語を楽しく学ぶきっかけをつくるために」という目的の設定が、外国語でクイズのやりとりをする必要性を生み出し、さらに児童の主体的な態度を促進させるようにした。



(2) 相手のことを考えて、自分の思いや考えを豊かに表現するための工夫（仮説2）

【伝える・聞くときの「4つの大切」を意識できるよう支援】

児童が相手のことを考えて、自分の思いや考えを表現できるようにするために、「4つの大切」を意識しながらコミュニケーション活動に取り組めるようにした。コミュニケーション活動の前に「4つの大切」を確認したり、活動において「4つの大切」ができているやり取りを動画撮影し中間発表で紹介したりすることで「コミュニケーションが楽しくなる」「自分もやってみよう」という思いをもてるようにした。また、クイズのやり取りをスモールステップで繰り返し行い、自信や安心感をもてるようにし、「1年生のために動物クイズをつくる」という単元のゴールを設定することによって、相手意識をもち続けながら活動に取り組めるようにした。



【中間発表で友達のよさを見付けて共有した】

【相手により伝わるように考えてクイズを出していた】

2. 指導の結果と考察 ○成果 ●課題

(1) 英語を用いて主体的にコミュニケーション活動に取り組むための工夫(仮説1)

○「What's this?」「It's ○○.」を軸とし、教師と児童、児童同士でクイズのやり取りを毎時間設定したことで、児童がやり取りに慣れ親しみ、意欲的にクイズに参加しようとする姿が多く見られた。また、スクールタクトでクイズを簡単に作成できるツールを用意したことで、分かりやすくするための画像を選んだり、ヒントの順番を考えてクイズがより面白くなるように工夫したりするなど、クイズを自分たちでつくる楽しさを感じている児童も多く見られた。「つくったクイズを友達に出したい」という気持ちだが、積極的に友達と関わる意欲にも大きくつながったと感じる。

○第1時の導入で「1年生の先生から依頼のビデオレター」という形で動画を視聴し、単元のゴール「1年生のために動物クイズをつくる」ことを児童と共有した。動画視聴の際には、大きく頷く反応や「やりたい!」と声を上げる児童も多く、昨年度の担任という児童が信頼している先生からの頼みという場面設定が、児童の「1年生のために頑張りたい」という目的意識を強くもつことにつながったと思われる。また、毎時間授業の導入で単元のゴールを児童と確認したことで、児童が常に目的を明確に意識しながら各授業に臨むことができた。単元のゴールの姿をイメージできたことで、学級でクイズのやり取りをする際にも、より分かりやすくするための工夫や伝え方の助言をし合う姿が見られた。

●「1年生に動物クイズを出す」という単元のゴールを設定してデザインしたことにより、児童がふれる単語が動物に関するものに限定されてしまう傾向が見られた。今後、児童の意思や選択によって既習の多くの英語にふれられるような機会を設けていくことも大切である。

(2) 相手のことを考えて、自分の思いや考えを豊かに表現するための工夫(仮説2)

○クイズづくりの場面では、「1年生に出すなら～」とヒントの難易度について再考する様子や、「ジェスチャーを入れた方が分かりやすく1年生が楽しんでくれるのではないか」と話し合う様子が見られた。また、単元終末のクイズ大会では、英語で「何とか1年生に伝えよう」「楽しんでもらおう」と、学習した言語材料を使う姿が見られ、相手に配慮しながら自分の思いを伝える児童の育成に効果的であったと考える。

○中間振り返りの際に、児童がやり取りしている様子を録画し全体共有した。共有では、①やり取りの中でどのように「4つの大切」を意識しているか、②自分の思いがより伝わるコミュニケーションになっているかという2点を児童の気付きと共に確認した。その後の2回目のやり取りでは、友達のよりよい姿に触発され、相手に配慮しながら「4つの大切」を意識したやり取りをする児童が増えた。

●「What's this?」「It's ○○.」等のクイズの基本的なやり取りが自然にできるようにならないと「4つの大切」を意識するまでには至らず、英語の語句や表現を「言う」ことに意識が向いてしまう児童の姿が見られた。自信をもって言語表現を使い、相手意識をもったやり取りをさせるためのスモールトークの工夫や学習形態を工夫して慣れ親しむ時間が不足していたと感じた。相手意識をもったやり取りが自然にできるようになるには、単元計画5時間では十分ではなく、単元計画を見直す必要がある。